オーウェルとサルトル

―反ユダヤ主義をめぐって―

西村　徹

爾曹のうち罪なき者まづ彼を石にて撃べし

―約翰傳第八章第七節

Und wenn sie sagen: "ich bin gerecht", so klingt es immer gleich wie: "ich bin gerächt!"

――Friedrich Nietzche

サルトルの『ユダヤ人』という本が岩波新書の一冊として出ている。多少とも左巻きのインテリなどが，ちょっとユダヤ人問題をかじっておこうというようなとき，サルトルのこの本は，マルクスのもの，ドイッチャーのものといっしょにして，いわば三点セットのようにもして読まれてきたものである。訳者「まえがき」によると，これの原書は『ユダヤ人問題についての考察（REFLEXIÓN SUR LA QUESTION JUIVE）』で，1947年に発表されたとあるが，Gallimard社刊の『サルトル書誌』(Michel Contat, Michel Rybalka, LES ÉCRITS DE SARTRE, Chronologie Bibliographie Commentée.）によると1946年にPaul Morihienから出版されたとある。おなじものがGallimardから再刊されたのが1954年で，岩波新書版は後者を底本として1956年に出されている。

ところでオーウェルが，この本らしきものについて1948年11月7日の「オブザーバー」誌に書評を書いている。「この本らしきもの」と言ったの

は，書評にとりあげている英語訳の書名が『ユダヤ人問題についての考察』ではなくて『反ユダヤ主義者の肖像』（*Portrait of the Antisemite*）となっているからで，おなじく『サルトル書誌』によると，後に『ユダヤ人問題についての考察』の第一章として，多少加筆して組み入れられることになった *Portrait de l'antisemite* に対応している。これならば 1945 年 12 月 *Les Temps modernes* の第三号に発表された，わずか 29 ページのもので，一冊の本として翻訳出版するには短かすぎる。また，オーウェルが触れている事項から見ても，英訳版は書名を *Portrait de l'antisemite* から採ってはいるが，REFLEXIÓN SUR LA QUESTION JUIVE を訳出したものと見てまちがいなさそうである。なんともまわりくどい話ではあるが，オーウェルが読んだ Secker & Warburg 刊の英訳が今のところ手に入っていないので，こんな風にあたりをつけるしかなかった。というわけで，オーウェルが英訳で読んだものを，こちらは日本語訳で読み，フランス語原本も，屁っぴり腰ながら，横目で睨んで事にのぞむしだい。さりとて，ここで正面切ってサルトルを取り上げてみようとか，ましてやオーウォルの尻馬に乗って切り刻もうなどという，「父親殺し（パトリサイド）」にも似た，おゝそれたことをするつもりはない。ユダヤ人の置かれている状況からはあまりにも遠い私どもとしては，サルトルからも学びうることはあまりにも多いからである。興味の中心はサルトルを切ることにはなく，オーウェルの切り口に窺われるオーウェルの物の見方にある。

さて，ではオーウェルのサルトル評はどんなものか。11 月 7 日の書評に先立って 10 月 22 日付，当の訳書の出版者であるウォーバーグに宛てた手紙の中で[1]「サルトルの駄ぼらには思いきり蹴りを入れてやる」と言い，同月 29 日付ジュリアン・サイモンズ宛の手紙には，さらに突っこんで[2]「四六時中反ユダヤ主義を捜して嗅ぎまわっている連中がいる。ファイヴェルなんかはきっと私も反ユダヤ主義だと思っているにちがいない。この問題についてはおよそ想像もつかないほどのでたらめが書かれてきた。サルトルのこの問題を扱った本を書評するために読んだばかりだが，こんな短いスペースに，

よくもこれほど愚にもつかぬことを詰めこんだものだ」としている。オーウェルが，同調の余地もなくサルトルを全面否定していることは動かないところと見てよかろう。さりとてオーウェルとサルトルが，いずれも反ユダヤ主義と闘う同じ戦線にあることもまた動かぬところであって，オーウェルがサルトルを攻撃するのは[3]「いささか逆説めくが，社会主義を防衛するには，まず社会主義を攻撃することから始める必要がある」というに似た理由によるであろう。

いよいよ書評本文を検討してみよう。短いものだから，段落の順を追って，省かないで紹介してゆくことにする。

1．「反ユダヤ主義は明らかに本格的な研究を必要とする問題だが，そういうものは近い将来に期待できそうにない」との書き出しに続いて「厄介なのは，反ユダヤ主義がもっぱら恥ずべき倒錯，ほとんど犯罪とのみ目されるかぎりは，反ユダヤ主義という言葉を耳にしているほどの教養人ならば誰しも，いきおい，自分はそんなものに染まっていないと言い立てるという点であろう。だから反ユダヤ主義に関する著作は他人の目のごみをあばき出す実習でしかないものになりやすい」とし，サルトルの本もまさにそういうものでしかないという。さらに「1944年という，パリ解放に続く不安と自己義認と売国奴狩りの気運に充ちた時代に書かれたものだからといって，それはそれでいいということにはなるまい」とまでいう。

サルトルが反ユダヤ主義を犯罪と見ていることはたしかなようである。

「人は，彼の体まで狂わせてしまった。彼の感情生活を二つに割ってしまった。そして，彼を突き放す世界の中で，普遍的兄弟愛のはかない夢を追う余地しか与えなかった。一体罪はどちらにあるのだろう。…われわれの言葉，われわれの態度が…ユダヤ人の骨の髄まで毒してしまった。…こうした事態においては，われわれのうちでひとりとして全く責任のないも

の，犯罪者でないものはいない。ナチスが流したユダヤ人の血は，われわれすべての頭にふりかかってくるのである」(サルトル)

あるいは，はるかこれに先立って，既に第一章の終り近くでも

「機能的には破壊者で，純粋に精神的には，サディストである反ユダヤ主義者はその心の奥底では，犯罪者である」(同上)

「反ユダヤ主義者は，犯罪者であることを，自ら選んだ。しかも，それは，潔白な犯罪者なのである」(同上)

という風に，同一ページに犯罪者（criminel）という語を四度も，たたみかけるように重ねて使って，反ユダヤ主義者の肖像画を完成している。ひとまず，サルトルが反ユダヤ主義を犯罪と見ている点で例外でないことは，これによって明らかになったものとして，そしてこれについては後で戻るものとして，オーウェルの言うところを先に進むこととする。

2．最初に，反ユダヤ主義に理性的根拠はないとサルトルは言い，最後に，無階級社会になれば反ユダヤ主義は消滅するが，それまでの間でも教育と宣伝によって相当程度対抗しうると言う。しかし，この程度のことはわざわざ言うほどの値うちのあるものではないし，現実的な問題の論議はほとんどなく，取上げるにたるほどの事実証拠は皆無である。

そのようにオーウェルは言う。

サルトルによれば，反ユダヤ主義は「魂の契約」（un engagement de l'âme）であり，むしろ「情熱」（*une passion*）であって，その本質をなすのは「歴史的与件」（l'a donnée historique）でも，「社会的与件」（donnée s sociales）でもなく，「ユダヤ人という観念」（*l'idée de Juif*）であって，「反ユダヤ主義者に，その主義を植えつけたのが，何等かの外的要素であるということはあり得ないことが，われわれにとって明白となってくる」というのだから，一切の「事実証拠」が排除されているのも当然ということになる。歴史的与件や社会的与件に関わる事実証拠を「本格的な研究」に期待す

るオーウェルにとってのみならず，日本史家が着実に日本被差別部落の起源に肉薄しつつある（らしき）現況を目のあたりにしている私どもにとっても，これはなんとも歯がゆいかぎりではあるが，「わたしは，直ちに，フランス史が，ユダヤ人については，なにも教えてくれないとお答え出来る」とサルトル自身も言うくらいだから，歯がゆい思いは，じつはサルトルの思いでもあったのかもしれぬ。また，歴史学者にこそ期待すべきことを哲学者などに期待するのは，木に倚って魚を求めることであるのかもしれぬ。いずれにせよオーウェルの指摘は妥当なものであろう。

さらに進むこととする。

3．労働者階級の間には反ユダヤ主義などほとんど見当たらぬこと。それはブルジョア，なかんづく，われわれの罪はなんでも一手に背負いこまされる小ブルジョアの病いであること。ブルジョアのうちでも学者，技術者にはほとんど見当たらぬこと。民族を伝統文化の形で考え，財産を土地の形で考える者の特性だということ。こういうことを「おごそかに申し渡される」

サルトルによれば，労働者の中に反ユダヤ主義者がほとんどいないのは，労働者は「国際主義者」(internationalistes) だからで，また「物質を扱う職業によって日々育てられた労働者は，社会を，厳密な方則に従って動く現実的な力の生産物と見る。その弁証法的『唯物論』は，労働者が，社会的世界を，物質的世界と同じように見ようとすることを意味している」からだそうである。学者，技術者はブルジョアでも例外で，「その職業が彼等をむしろ，プロレタリアに近づけている」(que leurs métiers rapprochent du prolétariat) から，あまり反ユダヤ主義者はいないのだそうである。

ところで，ブルジョアおよび小ブルジョアについてはどう言っているか。「多くの反ユダヤ主義者，多分その殆んどは，都会の小ブルジョア階級に属している。官吏や，会社員，小商人などで，財産などすこしも持っていない」

と言い，反ユダヤ主義は「貧乏人の事大主義的流行病」（un snobisme du pauvre）であって，「事実，金持達は，この情熱に身をまかせるよりもそれを利用している。金持には外にもっとすることがある。この情熱は，普通，中産階級に拡がる」とも言う。また，だから，彼らは「ユダヤ人と同等か，あるいはそれよりも高い生活水準を持つ人々」（les hommes qui ont un niveau de vie égal ou supérieur á celui des Juifs）であるとも言うので，「財産など少しも持っていない」、まるきりの「貧乏人」なのか，そうでもないのか，どっちなのかよく分からないし，ユダヤ人の平均的な富の水準も全く分からないまま，それと較べられても，さっぱり見当がつきかねるが，金持でもなく労働者階級でもない，どちらでもないというところで了解しておく他はない。

さて，この，貧乏人でもあり貧乏人でもないブルジョアないし小ブルジョアが，なにゆえ反ユダヤ主義に傾くかについても，生産者である労働者が世界を唯物的にとらえるのとの対比において，彼らが「非生産者」（*non*-producteurs）であることから必然的に観念的にならざるをえぬという。労働者はどんな殺人兵器や毒ガスをつくっても唯物的だから「国際主義者」で，小ブルジョアは「非生産者」だから生活者ですらないとでも言うかのような，半世紀を経た今日只今，古典的な史的唯物論講話としてもちょっと気恥しくなるような話が，まことに絢爛たるレトリックによってくりひろげられるけれども，今はそれには立入らぬとして，労働者とブルジョアあるいは小ブルジョアを，このようにシロとクロに両断する，なんともノーテンキな二分法は，オーウェルの認識とは真っ向うから対立するものだということを，ひとまず確認しておいて，先に進む。

4．こういう連中が選りに選って，なぜユダヤ人を槍玉にあげるのかを，サルトル氏はまったく論じていない。ただ，一箇所，ユダヤ人が嫌われるのは彼らがキリスト磔刑に責を負うとされているからだという，カビの生えた，また，はなはだいかがわしい理くつをくり出しているだけだ。彼は，

反ユダヤ主義を，例えば皮膚の色による差別のような，明らかに関連する現象につなげようとは全くしていない。

これがオーウェルの言い分であるが，皮膚の色差別など，他の類似の差別にまったく言及していないとするのは言い過ぎで，「もし，ユダヤ人が存在しなければ，反ユダヤ主義はユダヤ人を作り出さずにはおかないだろう」(si le Juif n'existrait pas, l'antisémite l'inventerait) とか，「ここでは，ユダヤ人は一つの道具にすぎない。他の地方では，ユダヤ人の代りにあるいは黒人が，あるいは黄色人種が用いられている」(Le Juif n'est ici qu'un prétexte : ailleurs on se servira du nègre, ailleurs du jaune) というようなことは言っているし，リチャード・ライトの発言をひきあいに出したりして，反ユダヤ主義もまた，他のすべての差別と問題性を共有していること，反ユダヤ主義だけが隔絶して特殊な事象でないことをまったく棚上げにしているわけではない。しかし，まさに触れるにとどまって，いちはやく，そそくさと立ち去るかに見えるところがオーウェルには大きな不満であったろうことも頷ける。これについても再論することとして次に進む。

5．サルトル氏の取り組み方のまちがっているところは，その題名にもあらわれている。この，定冠詞のついた反ユダヤ主義者というのは，常に一定不変，一目でそれと分かる，そして，いわば，四六時中行動を停止することのない人物であって，サルトル氏も一貫してそういうものと考えているらしい。ところが実際には，ちょっと目を働かせさえすれば，反ユダヤ主義はきわめて広く蔓延しており，一階級などに限定されるものでなく，なによりも，最悪の事例を別として，間欠的なものだと分かる。

たしかに，サルトルを読んで強く印象づけられるのはその昂ぶりである。昂ぶりによって肥大する観念の生々しさである。ここに登場する反ユダヤ主義者というのは，現実の世界に個人としての顔を持った，具体的に生活を営

むさまざまな人間であるよりも，ユダヤ主義という観念が，まさにア・プリオリに存在していて，普遍的で恒常的なその観念が擬人化された，まるでアレゴリー劇の登場人物のように日常性を欠いた，一種グロテスクな顔を持って立ち現われてくることである。そして現実の生身の人間は，もしいささかでもユダヤ人に好意的でないところがありさえすれば，その程度にはおかまいなく，すべて一挙に，サルトルによって完成された定冠詞つき反ユダヤ主義者の像のうちに収斂される。そうでない者もまた [4)]「ユダヤ人のために戦う」(lutter pour Juif) ことのないかぎり「反ユダヤ主義者との無意識な共犯」(notre complicité involontaire avec les antisémite) の罪を問われることになる。あるいは，直接ナチスドイツに占領された中で，レジスタンスを戦わざるをえなかった，そしてヨーロッパ解放の戦場ともなったフランス，そしてドレフュス事件の傷痕のいまなお癒えていないフランスと，さほど劇的な差別事件を経験してもいず，戦場になることもなかった，なんといっても微温的なイギリスとのちがいというようなこともあるのであろうか。

また反ユダヤ主義の蔓延についてのオーウェルの言説は，3の項で指摘している，階級によって善玉と悪玉とに分類するサルトルの二分法に，真っ向うから対立するオーウェル自身の認識の一端を示しているものでもある。これまた後でオーウェルの所説の詳細に立ち戻るときに改めて触れることとして先に進む。

6．しかし，反ユダヤ主義の蔓延が階級を超え，また間欠的であるというような事実はサルトル氏の細分的社会観 (atomized vision of society) にはうまくはまるまい。人間などというものは存在しない一彼はほとんどそういうようなもので，ただあるのは，ほとんど昆虫同様すべて分類可能な定冠詞つき労働者と定冠詞つきブルジョアなどという，いろんな類型の人間だけである。こうした昆虫同然の生物の延長上に定冠詞つきユダヤ人はあって，たいていはその肉体上の外観によって識別できるらしい。たしかに，ユダヤ人であり続けたがる「正統なユダヤ人」と，同化を望む「正統

でないユダヤ人」という，二種類のユダヤ人がいるが，ユダヤ人たる者，どちらに属するにせ，一個の人間というにとどまるものではない，と言う。歴史の現段階において，自ら同化しようとするユダヤ人はまちがっているのであり，われわれがユダヤ人の人種的起源を無視しようとするのもまた，まちがいである，と言う。通常のイギリス人，フランス人等々としてでなく，ユダヤ人のまま，ユダヤ人は各国家社会に受け入れらるべきだと，言う。

以上のようにオーウェルは，サルトルの所説を紹介している。「彼はほとんどそう言っているようなもの」どころか，はっきりと「人間というものは，元来存在しない」(Mais l'homme n'existe pas) と言い切っているのであって，それもそのはず，これはサルトルが実存主義者であることの証しと言っていいような，「実存は本質に先立つ」とする実存主義の基本テーゼなのである。それを知るほどの者には全く驚くほどのことではないのだが，オーウェルは[5]「実存主義となると，私には理解できるなどと大口は叩けない」(Existentialism, which I don't profess to understand) と自ら言っているくらいで，また，分からなければ困るなどと思いもしなかったろうから，ひたすらたまげてしまったのであろう。

さて，それを受けて，いよいよ結びの段落で，オーウェルはどのように言っているのだろうか。

7．こういう姿勢そのものが危険なまでに反ユダヤ主義に近いものだということが分かるだろう。人種偏見は種類の別なく神経症であって，そんなものが議論してみたところで，はたして増幅されるか衰えるかも怪しいものだが，この種の本の持つ正味の効能は，たとえあったとしても，たいてい反ユダヤ主義を，わずかながらもこれまで以上に蔓延させることになるのがおちだ。反ユダヤ主義の本格的な研究に向かう第一歩は，反ユダヤ主義は罪だと見るのをやめることだ。また一方，定冠詞つきユダヤ人とか定冠

詞つき反ユダヤ主義者とかいって，それについてわれわれとは種類のちがう動物みたいにいう言い方は，しないに越したことはない。

このように言うオーウェルの姿勢は，じつは階級障壁を越えるにあたっての彼自身の姿勢そのものでもある。[6)]「あの恥ずべき階級の斑痕はありのままにみとめて，できるかぎり強調しない方がはるかによい」というのは，「われわれと種類のちがう動物みたいにいう言い方はしないに越したことはない」というのと，発想だけでなく語法までもが似ている。しかし，定冠詞つき云々というについては，このようにいきなり概括するのはオーウェル自身にもしばしば見られる傾向である。おなじ『ウィガン桟橋への道』の中で，白人とビルマ人との身体条件の相違を語って，モンゴル系の方が白人より，はるかに小ぎれいな体を持っているとし，[7)]「ビルマ入は40歳を過ぎるまではまったくシワなどよらないし，そうなってからでも乾いた皮革のように萎むだけで，その肌理こまかい絹のような皮膚と，白人の肌理の粗い，ぶよぶよと垂れ下がる皮膚とを較べてみるがいい。白人は脛にも，腕の裏にも，胸板にも，ひょろひょろと醜い毛が生えている。ビルマ人はあるべき場所にふさふさと黒い剛毛があるだけで，その他はまったく無毛，たいていはあごひげもない。白人はほとんどかならず禿げるが，ビルマ人はまずめったに禿げない。ビルマ人の歯はキンマの汁で変色しているのが普通だが，一本も欠けずにそろっている。白人の歯は例外なく悪くなる。白人は普通不恰好で，太るととんでもないところがせり出す。モンゴル系は骨格が美しく，年とっても若いときとほとんどかわらず形がよい」と言う。この中で白人とビルマ人ないしモンゴル系はすべて定冠詞つき。けっこう二人は似ているのでもある。また，この話が，いくらか眉つばにも見えながら，それなりの説得力を持ちえているのは，サルトル同様オーウェルもなかなか断言的で，サルトルはレトリシャンとして，オーウェルはサティリストとして，どちらも相当のカリマス性を保ちえているのも，こういうところに理由があるのであろう。オーウェルがそこを見破ったのは，目糞は鼻糞に目敏いということであろう

か。いずれにせよ，ものを言うときは，とどのつまりは概括的，断言的であらざるをえないものであって，いくら屁っぴり腰でものを言ってみたところで，言ったことには責任をまぬがれぬ以上，歯切れよく言うかどうかのちがいでしかなかろう。オーウェルが問題にしたかったのは，ものの言い方の良し悪しではなくて，第1の段階で述べているように，むしろ自分のアリバイを作ろうとすることであったろう。つまりは「罪なき者，石もて打て」と言いたかったのであろう。いくら定冠詞つきビルマ人を賛美したところで，いくら定冠詞つき白人をこきおろしたところで，思わず笑ってしまうことはあっても，誰もうしろめたい気になったりはすまい。白人差別だといって目くじら立てる者など，よほど石頭の阿呆でないかぎり，いるものではあるまい。話が大げさだから，落語を聞くようにユーモアとして聞くだけのことであろう。そしてあるいは，[8] 自分は醜男だと頑なに信じて疑わなかったオーウェルの，度外ずれたノッポの，あの「憂い顔の騎士」の姿が瓢然と浮かぶことはあっても，オーウェルがサルトルのうちに嗅ぎつけた自己義認の影は微塵も見当たらぬ。したがってオーウェルがサルトルの定冠詞に腹を立てたのは，じつはサルトルの，いわゆる“Political Correctness”（ニシキノミハタ）に対してであったといえよう。

それではオーウェルがユダヤ人あるいは反ユダヤ主義について，どのようにとらえていたか，少し詳しく見ておこう。いくつもの場所で，彼はユダヤ人の問題に触れているが，まとまったものとしては1945年2月に書いて同年4月の『コンテンポラリー・ジューイッシュ・レコード』に掲載された「イギリスにおける反ユダヤ主義」というものがある。他にも，もっと小さい記事ではあるが，この一年前の1944年2月10日の『トリビューン』に「私の好きなように」という読み切り連載ものの一つとして書いたものもある。さらに一年前の1943年7—8月の『パーティザン・レヴュー』というアメリカの雑誌に寄稿した「ロンドン通信」の中でも，当時のイギリス国内におけるユダヤ人の置かれた状況をつたえている。そういうものを総合して，とりまとめてみよう。

ユダヤ人嫌いから採取した聞きとりの結果は，サルトルのばあいもオーウェルのばあいも同じような内容のもので，大衆の素朴な反応は英仏ほとんど差がないといえる。反ユダヤ主義的な感情に理性的根拠はないとする点も二人に共通している。もちろん，ユダヤ人差別はなくさねばならぬとする点も共通している。ちがいはそのための方法であり，方法に達する認識の過程である。サルトルは，反ユダヤ主義は労働者階級には不在で，主として小ブルジョアに固有の，まさしく階級犯罪であるととられる。他の人種差別とは異質だとまではいわぬまでも，それらとの関連はほとんど顧慮されない。

労働者免罪説，したがって小ブルジョア主犯説は，オーウェルの見るところと大きく食いちがう。オーウェルは，[9]「反ユダヤ主義は主として労働者階級のものであり，アイルランド人労働者の間で最も激しい」と，あくまでも個別イギリスの状況をつたえる文脈の中でではあるが，述べている。サルトルのばあいも，当然フランスの労働者を念頭に置いてのことであろうが，まったくそういうことわり書きはなく，1925年のドイツの小ブルジョアが「ブルジョワの服装をするのを喜ぶと同時に，すすんで反ユダヤ主義に身を投じた。それは労働者達が，国際主義者であったからにほかならない」と言っているところを見ると，サルトルのいう労働者はフランスの労働者とはかぎらず，もっと普遍性のあるものとして語られているもののようである。そうすると，サルトルの普遍性は，なぜかイギリスには通用しなかったということであろうか。サルトルは事実証拠抜きで，いきなり「労働者は…」というのに対して，オーウェルは[10]「私は労働者階級の反ユダヤ主義のいくつかの実例を，三年間，ユダヤ人の多い地区の国防市民軍—これは恰好の社会断面図である—の中で垣間見た」こととして述べている。さらにサルトルが主として槍玉にあげている小ブルジョアとの対比において「私の経験では，中産階級の人々にはユダヤ人を笑いものにしたり，ある程度は差別したりするところもあるが，ユダヤ人は非ユダヤ人を搾取して生活する狡猾で不吉な人種だと，本気で信じこんでいるのは労働者の間にこそ見られるものだ」としている。別な箇所で[11]「私はほとんど全面的に私自身の限られた経験に頼っ

ているので，あるいは私の結論のことごとくが他の観察者によって否定されるかもしれない」と，オーウェル自身が述べているように，経験がすべてではないにせよ，なにひとつ事実証拠がないばあいより，少くとも個別イギリスに関しては信頼できることではないかと思う。

このように，フランスとイギリスのちがいということをひとまず棚に上げると，両者の事実認識は相反するものになるが，そしてオーウェルの言い分の方が，それが事実証拠に基いている分だけ，分があることになるが，さりとて強ちサルトルの言い分はまちがいだと決めつけるわけにもゆくまい。なるほどオーウェルは1945年に[12]「イギリスにはわれわれが認めたくないほどの反ユダヤ主義が存在しており，戦争によってそれはいっそう強まっている」としつつも[13]「今日反ユダヤ主義の存在は十分明かなところだが，30年前と較べて，おそらくむしろ下火になっている」と言い，2年前の1943年に『パーティザン・レヴュー』に書き送ったのと同じことを繰り返している。また[14]「ユダヤ人に対する集団暴力を容認したり，さらに重要なことだが，ユダヤ人排斥法を制定したりするのは，イギリスではありえぬことである。反ユダヤ主義が大手を振ってまかり通るなどということは今のところありえない」とも言い，やはり1943年における[15]「大虐殺（ポグロム）に走ったり，ユダヤ人老教授を汚水溜めにほうりこんだりしたがる者はひとりもいないし，いずれにせよイギリスでは犯罪と暴力はきわめて少い」事情に変化はないとしている。しかし，また，[16]「1950年の青年知識人が1914年の時のように素朴な愛国者になるかもしれない。そうなればフランスの反ドレフュス派の間に勢いのあった，そしてチェスタートンとベロックがこの国に（フランスから—筆者注）輸入しようとした，あの反ユダヤ主義にも足場ができるかもしれない」と言っているところからも分かるように，フランスのばあいは反ユダヤ主義の現われ方もイギリスのばあいとは相当にちがっているらしくもあるので，サルトルのおどろおどろしい告発にも，それ相当の理由があるのであろう。対独協力者（コラボ）の女性をつかまえて，髪を刈り，衣服を剥いで，顔に鉤十字（スワスチカ）を描いて，パリ市中をひきずりまわしている新聞写真について，オー

ウェルは眉をひそめつつも,[17]「こんなことをしたからといって，フランス人を責めはしない。フランス人は4年間も苦難を舐めてきた。そして彼らがコラボにどんな感情を抱いているか，おぼろげながら私にも察しはつく」と言っているところからも，それにもかかわらず，また，それゆえにこその，サルトルの不毛性批判であったのであろう。

おなじことが，サルトルのばあい，人種差別など，他の関連する事象への目くばりがほとんど見られぬ点についても，あてはまるかもしれぬ。もちろん，オーウェルにも，4において「選りに選ってなぜユダヤ人を槍玉にあげるのか」と言い，一般論としては正しい「贖罪の羊」説といえども,[18]「それは他の少数集団でなくてユダヤ人だけがなぜ槍玉にあげられるかを説明していない」と言っているように，ユダヤ人にかぎっての特殊性を決して無視しているのではない。しかし，だからといって，この問題に取組むにあたって，いささかでもユダヤ人に好意的でなかったり，その種の発言があったりしたばあい，その程度によらず闇雲に追及あるいは糺弾すべきものとは考えていず，無差別画一的に攻撃する言葉狩りのようなことは，不毛であるよりは有害だと批判している。以下は1948年10月29日付ジュリアン・サイモンズに宛てた手紙の中で，サルトルの『反ユダヤ主義の肖像』に触れた，その前段として書かれているものなので，少々長いがここに引用する。

[19] エリオットは反ユダヤ主義だとかファイヴェルが言っていたが，ナンセンスだ。もちろん彼の初期の作品には，今日反ユダヤ主義的と呼ばれるような発言が見られるが，当時あんなことを言わなかった者がいるだろうか。1934年以前に言ったことと，それ以後に言ったこととははっきり区別しないといけない。もちろんこういうナショナリスティックな偏見はすべてばかげているが，ユダヤ人を毛ぎらいすることは，黒人やアメリカ人，あるいはその他の人間集団を毛ぎらいすることに比べて，本来的に悪いものだというわけではない。20年代初期のエリオットの反ユダヤ主義的発言は，下宿屋にいるインド帰りイギリス人大佐を見て思わずニャッと笑っ

てしまうのと似たり寄ったりのものだ。ところで，ユダヤ人迫害が始まって後にそういうことを書いたのなら，まったくちがった意味を持ってくるだろう。たとえばアメリカにもあるイギリスぎらいをとって見たまえ。エドマンド・ウィルスンのような人にさえそれはあるではないか。そんなものはどうでもいいのだ。われわれが迫害されているわけではないのだから。しかし，もし600万のイギリス人が最近になってガス室で殺されたのだとしたら，イギリス女の反っ歯を笑う記事がフランスのコミック紙に出ているだけでも，私は穏かならぬ気になるだろう。

外国人ぎらいにかけてはフランス人もイギリス人にひけはとるまい。フランス国内でもブルターニュやアルザスに対する偏見は，イギリス国内の類似のもの同様世界中どこにでもあるものだろう。またフランスにもいろんな有色人種はいるし，それに対する偏見がないはずはあるまい。しかし，なにぶん過去におけるその帝国の規模からいって，イギリスでは，反ユダヤ主義そのものも，フランスのばあいほどには顕在化せず，あまりに多様な差別の種々相の一つとして希釈され，相対化されやすいというようなこともあって，上のような発言は出てくるのではあろう。たしかに国によって状況はちがうのだから，サルトルがフランスの状況に基いてオーウェルとちがったことを言うのにはそれなりの理由もあるだろうが，オーウェルの批判はそのちがいよりも，状況はさまざまにちがってくるという認識がサルトルには欠けているという点に向けられる。国によってのみならず，同じ国の中でも時代によって状況は変わること，状況もまた—あたりまえの話だが—相対化されねばならぬことを，1934年の前後でのちがいを例にとって述べているが，状況をお家芸のように言ってきたサルトルを，オーウェルがまさに状況論的に批判しているのは皮肉である。サルトルは状況を，しかも1945年の，フランスの状況を超歴史的に絶対化してしまった。この批判は，わずか5年の間に「ドイツによるロシア支配と，ロシアによるドイツ支配」という正反対のことを予言したバーナムに対する批判と通底している。バーナムは現に起こっ

ている事態を絶対化したために誤った。したがって[20]「現に起こっていることの説明としては，バーナムの理論は，ごく控えめに言ってもきわめて説得的である」のと同じことがサルトルのこの本にもあてはまるであろう。事実目の前にそのとおりのことがあるのだから，あとさき左右に目をやらず，「すゝんで不信を停止」してそれだけ読めば，いかにも風通しがよくて爽快でさえあるだろう。

それではオーウェルは，1934年のようなことがなければ少々ユダヤ人をジョークの種にするぐらいはかまわないと言うのだろうか。たしかに，そのために，オーウェルは反ユダヤ主義者だなどと，そそっかしいことを言う人もあるにはある。インド帰りイギリス人大佐を見て思わずニャッとしてしまうことが（the automatic sneer one casts at Anglo-Indian colonels in boarding houses）が，褒められたことではなくても，摘発の対象にまではならぬとすれば，ユダヤ人についても同様だとオーウェルが考えていたことは確かであろう。そしてそれは，ファイヴェルの言うとおり，[21]「井の中の蛙のイギリス人らしい物の見方」(a very parochial English view of the matter）であるだろう。ヨーロッパ大陸における反ユダヤ主義の根深かさ，複雑さは島国イギリスのオーウェルには見えにくかったのであろう。ロシア革命時の白軍によるユダヤ人虐殺や，ワイマール共和国の敵によるユダヤ人攻撃や，1914年以前のウィーンのユダヤ知識人の置かれた困難な状況など，ファイヴェルが列挙している諸事実を，オーウェルは知らぬわけではなかったが，実感的認識にはならなかったのであろう。そしてまた，ファイヴェルがケストラーの言葉としてつたえているように[22]「オーウェルの想像力は限界のあるものだった。それは誰しもそういうものだろう。誰しも限られた熱量の憤りしか産みだせないものである」だろう。ユダヤ人であるファイヴェルやケストラーとちがって，踏まれていないオーウェルには踏まれている者の気持は分からないということはあったろう。しかし，踏まれていない者はみな踏んでいるという，無差別画一的に攻撃を加える理くつには，オーウェルは納得しない。もしそういう理くつが成り立つとしたら，それは，「今日

のポーランド人が，イスラエル人に対して，かってのやり口を根に持って怨恨を持ちつづけているとしたら…おじいさん達のあやまちを，孫達に非難するのは，既に，責任ということにはなはだ原始的な意味を持たせていなければ出来ないことだが，それだけでは，まだ足りない。おじいさんの代にどんな人間だったかということをもとに，孫達について，一定の概念を作り上げていなければならない」とサルトルが反ユダヤ主義者の精神構造についていうことが，そのまま向きを変えて，ここにもあてはまることになるだろうからである。つまり，十把ひとからげ，程度の差も無視して，針の穴を探がすようにもしてその罪を発き立て，時にはただ黙っている者にさえフローベールやゴンクールに対してそうしたように，その責任を問う，というようなやり方は，反ユダヤ主義を攻めていながら反ユダヤ主義と同じことをやっていることになるのである。ミイラ取りがミイラになるということはあるのだ。オーウェルも引用しているニーチェの言葉どおり[23]「あまりに長く竜と闘う者は自ら竜となる」のだ。そういうことをしているとかえって「反ユダヤ主義を，わずかながらもこれまで以上に蔓延させることになる」というのはそのことを指している。

このように反ユダヤ主義は罪だと考えることに，いつまでもしがみついていると，それはさらに具体的にどういう袋小路に導くかについて，次のように言う。[24]「自分の考え方が弁護の余地なく間違っていることを知り抜いていながら，なおかつ反ユダヤ主義，あるいは少くともユダヤぎらいは相も変らぬということもありうる。誰かが嫌いだとなったら，どうしょうもなく嫌いでしかない」のだ。そのような，理くつでは通じぬ神経症を，罪であるといわれると，人は建前と本音を分けるようになる。1934年以後は建前がぐっと前に出て，ユダヤ人を種にしたジョーク（Jew Joke）は姿を消した。誰もユダヤ人に対して批判的なことは言わなくなった。それどころかユダヤ人にごまをするような傾向さえ窺えるようになった。[25]「ユダヤ人は難渋している。彼らを批判してはならぬ」というわけだ。だから建前として反ユダヤ主義そのものが姿を消した。しかし本音は一層深く潜行するようになっ

た。[26]「ユダヤ主義的感情を自認するくらいなら死んでしまいたいなんて言うような人は，大部分が心中ひそかにその感情に傾いている」ともいえるようなことになった。そして物書きたちは，自分はシロであることを強調するために，あるいはむしろ装うために，ますます告発者の側に身をすり寄せて，反ユダヤ主義の罪を鳴らす。そのためにますます人々の本音は根深く心の底に巣食うようになるという悪循環が生まれる。「私は嘘をつかぬ」と言う嘘つきがどれだけいることか。死を怖れないと，口先で言うだけで死の恐怖は消えるものか。もし，それでも，そういう一種のテロリズムが成功するとするならば，それこそ『1984年』の管理体制が完成される日になるであろう。つまり，それは，人間が人間でなくなる日であって，そうでなければ，新しい抗生物質が新しい抗体を喚びだすように，どこまでも本音の部分は根強く生き延びることにしかならなぬだろう。

オーウェルの処方はこれとは逆になる。自分のアリバイをつくるために他人の罪を言い立てるのではなく[27]「いくらかでも信頼するに足る証拠をとらえうる唯一の場所，すなわち自分自身の心の中を調べることから始める」べきだという。したがって[28]「なぜ他の人はこんな明白に非理性的な信念に心動かされるのであろうか」ではなく「なぜ自分は反ユダヤ主義に心動かされるのであろうか」であるべきだという。「いちばんよいのは反ユダヤ主義を発き立てるのではなく，自他を問わず心中にみとめられる反ユダヤ主義支持の立脚点をことごとく洗い直すことから始めることだ」という。もう昔のことではあるが，ラジオの放送でジェイムズ・カーカップ氏が Discrimination is human と言い，inhuman とは言わなかったのが，まことに印象的であったことを記憶している。ここで inhuman という方が，はるかに耳に馴染むような当時の（そして今の）日本の精神風土の中でのことであったから，いっそうそれは新鮮なものに聞こえた。オーウェルもまた同じところから出発すべきことを言っているのである。

しかし，オーウェルのこの処方は，「いちばんよいのは…」とは言っているが，これが究極の特効薬だと考えているわけではなく，副作用がないとい

う点で「いちばんよい」と言っているだけである。これひとつに局限して取組んでも，なにかラッキョの皮剥きのようなもどかしさはあって，もっと奥の底に広くはびこるものとして，[28]「しかし，ナショナリズムというさらに大きな病いを癒やさずして，反ユダヤ主義が決定的に癒やされようとは，私には信じられぬ」としている。これを書く数箇月後に別な箇所に書いた「ナショナリズム覚え書」によると，ナショナリズムという言葉は他に適当な言葉が見あたらないので便宜上使ったもので，パトリオティズムが防御的で，他人に押しつけることをしないのと大ちがいで，ナショナリズムは，集団に個人を埋没させて，攻撃的に，その主義主張（cause）を他人に押しつけようとする権力欲だとしている。ナショナリズムという政治的な概念が背負いこむにはいささか無理とも思えるほどのことにまで及んでいて，むしろそれが含意するものとして挙げている権力欲，あるいは権力意志という方が，問題の病根を指すものとしては適切に思えるが，『1984年』の中でウィンストンを介して，この病根に「なにゆえ？」と問うて立ち尽すオーウェルが，ここでもこの問題に深くこだわっていることが窺われる。概念の立て方，その展開のし方に十分に熟さぬところがあるとはいえ，権力意志がマイノリティーの運動にもウィールスのように忍びこんでくることを鋭くとらえ，反ユダヤ主義のみならず，シオニズムもまたナショナリズムの一種であることを見抜き，[30]「たとえば，ユダヤ人は反ユダヤ主義にはならないが，ところでシオニストのユダヤ人には，ただ裏がえしの反ユダヤ主義者（antisemites turned upside-down）にほかならぬ者が多いように見える」と，歯に衣を被せていない。踏まれていないから距離をとることができて，かえって踏まれている者には見えないものが見えたということであろうか。それだけであろうか。なぜか，サルトルの，この本には，シオニストに対する批判の言葉はない。他方サルトルは，同じく『サルトル書誌』によると，20年後の1966年のインタヴューで，「正統性かならずしもイスラエル国家を選択したということにはならぬ」（L'authenticité ne signifie pas nécessairement qu'on a opté pour Israël）と，ちょっと苦しいことを言いつつも，他国

民との同化を志向する「非正統ユダヤ人」(Juif inauthentique) にはきびしく批判的である。オーウェルは，まったく攻撃的でもない「非正統ユダヤ人」の自主選択に外から鼻を突っこむことはいっさいしていない。この両者のちがいは小さくないように思われる。

注

1) Sonia Orwell and Ian Angus (ed.), *Collected Essays, Journalism and Letters* (以下 *CEJL* と略記), Secker & Warburg. 1968, Ⅳ, p.448.

I am going to give him a good boot.

2) Ibid., Ⅳ, p.450.

Some people go round smelling after antisemitism all the time. I have no doubt Fyvel thinks I am antisemitic. More rubbish is written about this subject than any other I can think of. I have just had Sartre's book on the subject for review, and I doubt whether it would be possible to pack more nonsense into so short a space.

3) George Orwell, *The Road to Wigan Pier* (以下 *RTWP* と略記), Penguin, 1962, p.151.

rather paradoxically, in order to defend Socialism it is necessary to start by attacking it.

4) *Portrait de l'antisemite* を発表した2箇月前，*Les Temps moderne* 創刊号巻頭の「創刊の辞」でも，「私はフローベールやゴンクールを，コミューンにつづくあの弾圧について責任があると考えている」と述べているところと符合する。

5) *CEJL*, Ⅳ, p.450.

6) *RTWP*, pp.201-2.

It would be far better to take those miserable class-stigmata for granted and emphasize them as possible.

7) Ibid., pp.124-5.

8) Malcolm Muggeridge, "*A Knight of the Woeful Countenance*", Miriam Gross (ed.), *The World of George Orwell*, Weidenfeld and Nicolson, 1971. p.168.

he was obsessed with the notion that he was physically unatractive.

9) *CEJL*, Ⅱ, p.290.

antisemitism is primarily a working-class thing, and strongest among Irish labourers.

また「イギリス人の伝統的な外国人ぎらいは，中産階級よりも労働者階級の間に強い。戦前，ファシスト諸国から亡命者が大量に流入するのをはばんだのは，ひとつには労働組合の抵抗があったからだ」（*CEJL*, Ⅲ, p. 3）とも述べている。サルトルの「労働者国際主義者」説とは正反対の認識である。

10) *CEJL*, Ⅱ, p.290.

I have had some glimpses of working-class antisemitism through being three years in the Home Guard — which gives a good cross-sectionof society — in a district where there are a lot of Jews. My experience is that middle-class people will laugh at Jews and discriminate against them to some extent, but only among working people do you find the full-blown belief in the Jews as a cunning and sinister race who live by exploiting the Gentiles.

11) Ibid., Ⅲ, p.340.

I have relied almost entirely on my own limited experience, and perhaps every one of my conclusions would be negatived by other observers.

12) Ibid.

There is more antisemitism in England than we care to admit, and the war has accentuated it,

13) Ibid., p.337.

though antisemitism is sufficiently in evidence now, it is probably *less* prevalent in England than it was thirty years ago.

14) Ibid., p.336.

tolerance of mass violence against Jews, or, what is more important, antisemitic legislation, are not possible in England. It is not at present possible, indeed, that antisemitism should *become respectable.*

15) Ibid., Ⅱ, p.291.

It is true that no one wants to have pogroms and throw elderly Jewish professors into cesspools, but then there is very little crime or violence in England anyway.

16) Ibid., Ⅲ,p.339.

The young intellectuals of 1950 may be as naively patriotic as those of 1914. In that case the kind of antisemitism which flourished among the anti-Dreyfusards in France, and which Chesterton and Belloc tried to import into this country, might get a foothold.

17) Ibid., p.230.

I don't blame the French for doing this kind of thing. They have had four years of suffering, and I can partially imagine how they feel towards the collaborators.

18) Ibid., p.90.

it does not explain why the Jews rather than some other minority group are picked on,

19) Ibid., Ⅳ, p.450.

20) Ibid., p.165.

as an interpretation of what *is happening,* Burnham's theory is extremely plausible, to put it at the lowest.

21) T. R. Fyvel, *George Orwell, A Personal Memoir,* Hutchinson, 1983, p.181.

22) Ibid., p.182.

probably Orwell's imagination was limited, as the imagination of each of us is limited. We can all produce only a limited amount of calories of imagination.

23) *CEJL,* Ⅲ, p.230.

He who fights too long agaist dragons becomes a dragon himself.

24) Ibid., p.334.

people can remain antisemitic, or at least anti-Jewish, while being fully aware that their outlook is indefensible. If you dislike somebody, you dislike him and there is an end of it:

25) Ibid., p.336.

the Jews were in trouble and it was felt that one must not criticize them.26) Ibid., p.338.

many people who would perish rather than admit to antisemitic feelings are secretly prone to them.

27) Ibid., p.340.

to start his investigation in the one place where he could get hold of some reliable evidence — that is, in his own mind.

28) Ibid., p.341.

not "why does this obviously irrational belief appeal to other people?" but "why does antisemitism appeal to *me*?"

it would probably be best to start not by debunking antisemitism, but by marshalling all the justifications for it that can be found, in

one's own mind or anybody else's.

But that antisemitism will be definitively *cured,* without curing the larger disease of nationalism, I do not believe.

附　記

1．『サルトル書誌』，『ユダヤ人』のGallimart社原本，*Les Temps modernes* 第三号所載の *Portrait de l'antisemite* のコピー，いずれも入手は本学の同僚でサルトルに詳しい岩津洋二氏に負うている。岩津氏との出会いがなければ，この論文は存在しなかった。

2．論文は基本的に一言語で統一すべきもので，日本語で書きながら引用原文は外国語のままほうりだすやり方には強い疑念を抱いているので，引用文はすべて日本語訳とした。サルトルからの引用は，すべて安堂信也氏の訳文によった。したがって後注に原文を掲げることはしなかった。訳責を問われるに足る資格を私は持たないからである。オーウェルからの引用は，十分既訳を尊重しつつも，最終的な訳責は私にあるものとして，洩らさず原文を後注に掲出したかったが，煩雑にわたることを避けるため中心的に紹介した書評本文は割愛した。参考のため，ここに本文出所を示しておく。*CEJL*，Ⅳ，127，pp.452-3（Secker & Warburg）; pp.511-3（Penguin）。日本語訳は『オーウェル著作集』Ⅳ，127，pp.436-7（平凡社）。また，長きに過ぎるもののみならず，割愛可能と思えるものは割愛した。割愛の基準は，あるような，ないような，大方は，ただでさえ老いて霞んだ頭が暑さに茹だっての仕業である。

3．*CEJL* の注記ページは Secker & Warburg 版のもの。

Orwell and Sartre

—— On their respective approaches to anti-semitism

Toru Nishimura

The Sole reference to Jean-Paul Sartre in all of George Orwell's works is his review of *Portrait of the Antisemite* (the English translation of *Reflection sur la question juive*) in the *Observer* No. 7 , November 1948, where he criticises Sartre sharply for being nothing but "a bag of wind". Although the review itself is fairly short, Orwell's writings concerning anti-semitism itself amount to at least as many pages as those of Strtre's book. The intention of the present essay is to compare the two writers' respective approaches to the question of anti-semitism. It will be argued that Orwell's typically parochial and practical approach nevertheless achieves a degree of intellectual penetration where Sartre's, which attempts to analyse the question simultaneously on both empirical and philosophical levels, is ultimately, as Orwell himself pointed out, nothing but a "bag of wind".